

Japan Resuscitation Council

JRC

NEWSLETTER

<https://www.jrc-cpr.org/newsletter/>

Volume **6** No1.
December, 2024



一般社団法人

日本蘇生協議会
Japan Resuscitation Council

ISSN 2433-3123

INDEX

1 特集企画

<寄稿> 日本蘇生協議会名誉会長・故 岡田和夫先生を偲んで

日本蘇生協議会 代表理事
 公立昭和病院院長／帝京大学医学部名誉教授・客員教授 坂本 哲也 …… P.2

日本蘇生協議会 最高顧問
 大阪青山大学健康科学部 特任教授 野々木 宏 …… P.3

日本蘇生協議会 名誉会員
 内閣府健康・医療戦略参与 笠貫 宏 …… P.4
 愛知医科大学名誉教授 野口 宏 …… P.5
 医療法人徳洲会 集中治療部 顧問 丸川 征四郎 …… P.6

日本蘇生協議会 業務執行理事
 香川大学医学部救急災害医学 教授 黒田 泰弘 …… P.7

日本蘇生協議会 事務局長・元常任理事
 国際医療福祉大学医学部・成田病院 脳神経内科・集中治療部教授 永山 正雄 …… P.8

日本蘇生協議会 広報委員会委員長
 東京慈恵会医科大学 救急医学講座 主任教授 武田 聡 …… P.10

2 日本蘇生科学シンポジウム(J-ReSS)

第14回日本蘇生科学シンポジウム プログラム …… P.11
 第14回日本蘇生科学シンポジウム 開催報告 …… P.12
 黒田 泰弘(第14回日本蘇生科学シンポジウム開催実行委員長)

第15回日本蘇生科学シンポジウム プログラム …… P.14
 第15回日本蘇生科学シンポジウム 開催報告 …… P.15
 田邊 晴山(第15回日本蘇生科学シンポジウム開催実行委員長)

第16回日本蘇生科学シンポジウム プログラム …… P.16
 第16回日本蘇生科学シンポジウム 開催報告 …… P.17
 鈴木 昌(第16回日本蘇生科学シンポジウム開催実行委員長)

第17回日本蘇生科学シンポジウム ご案内 …… P.18
 新田 雅彦(第16回日本蘇生科学シンポジウム会長)

3 OKADA AWARD最優秀演題賞

第14回(J-ReSS)日本蘇生科学シンポジウム …… P.19
 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻先端中核看護科学講座
 クリティカルケア看護学分野 西山 知佳

第16回(J-ReSS)日本蘇生科学シンポジウム …… P.20
 慶應義塾大学医学部救急医学 多村 知剛

故岡田和夫先生を偲んで 日本蘇生協議会名誉会長

人生の最後まで学究の徒 衰えることのなかった岡田先生の向学意欲

日本蘇生協議会(JRC)およびアジア蘇生協議会(RCA)の初代会長として創設に尽力され、わが国の蘇生科学の発展に大きく貢献された岡田和夫先生に深く感謝するとともに、岡田先生のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表したく思います。

岡田先生は1972年12月から2002年3月まで30年間、帝京大学医学部麻酔科学講座の主任教授を務められました。2002年4月に帝京大学医学部救命救急センター教授として赴任した私とは丁度入れ違いの人事となり、残念ながら大学で机を並べる機会を得ることはできませんでしたが、蘇生科学という専門を同じくする大先輩として、学会場でお会いすることも多く、まだ若かった私に親しくお声をかけていただいた思い出があります。

岡田先生と海外で始めてお会いしたのは、翌2003年のことでした。この年のアメリカ心臓協会(AHA)の学術集会であるScientific Sessions 2003は11月9日からフロリダ州オーランドで開催されましたが、前日の11月8日に初めてのResuscitation Science Symposium(ReSS)が開催されました。現在、ReSSはAHA Scientific Sessionsの主要なプログラムの一部となっていますが、当初はPre-congressイベントとして企画され、国際蘇生連絡委員会(ILCOR)の声かけで世界中から蘇生科学の研究者が集結しました。



写真はいずれも第1回Resuscitation Science Symposium(ReSS)会場にて
 場所 Orlando, Florida, USA (撮影 2003.11.8)

当時、帝京大学に着任して2年目の私は、同僚の金子一郎先生と演題を準備して渡米しましたが、その会場の最前列で熱心に参加する岡田先生にお会いしました。ReSSはどのセッションも質疑応答が絶えませんでした。岡田先生は世界の蘇生科学の巨人達の中で常に口角泡を飛ばす議論の中心にいらっしゃり、もの怖じしない積極的な姿勢に深く尊敬の念をいただいたのを覚えています。納得できないこと、わからないことは何でも遠慮せず質問する岡田先生の姿は、その後も参加される全ての学会や会議で長く生涯に渡って拝見することになり、人生の最後まで学究の徒の鏡として衰えることのなかった岡田先生の向学の意欲に頭が下がります。

その後、JRCは2010年から5年毎にILCOR CoSTRに準拠したJRC蘇生ガイドラインを作成してきました。ガイドラインの編集は、委員が夜通し会議室にこもり膝詰めで行う作業となっていました。その日のノルマが終わると夜が明けて、始発の電車で帰ることも稀ではありませんでした。この熾烈な編集委員会の中で、最年長の岡田先生は体力の限りを尽くして議論に参加され、一つの文たりとも疎かにすることなく、活発にご意見されていました。自分が、当時の岡田先生の年齢に少しずつ近づいていく中で、晩年の岡田先生の気力と叡智にあらためて感動を禁じ得ません。

岡田先生の悲願であったJRCを発展させ、JRCの使命を果たしていくことが、未来を託された私たちの役割であり、岡田先生への最大の供養になると考えております。

ここに深く感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。



一般社団法人
 日本蘇生協議会 代表理事

公立昭和病院院長
 帝京大学医学部名誉教授・
 客員教授

坂本 哲也

故岡田和夫先生を偲んで 日本蘇生協議会名誉会長

JRC設立前夜： 世界に誇る隠れた蘇生学の業績を振り返る

日本蘇生協議会(JRC)の創設者で長らく会長をお勤めになりました岡田和夫先生のご逝去に接し、先生のご活躍の日々に思いを馳せたいと思います。

岡田和夫先生(1931-2023)は、東京大学麻酔科入局後にパリ大学 Claude Bernard Hospitalに留学され、人工呼吸管理とSAMUを学ばれ、その頃から救急蘇生学にご興味を持たれ、帝京大学麻酔科教授(1972~2002)を退官後のJRC設立につながったものと思われます(医学のあゆみ 2011:939)。

本稿では、JRC設立までの世界に誇るべき蘇生学でのご業績に焦点を当ててさせていただきます。

わが国のCPRトレーニングの標準化は、2003年の米国心臓協会(AHA)のBLS、ACLSコースの導入によるところが大きいと思われます。これはJRC参画学会・団体から10名の代表者がAHAの米国トレーニングセンターへ派遣され、インストラクター資格を取得し、その後普及に努めたことによります。

その後、JRCに続いて2007年に日本循環器学会がAHAとの国際トレーニングセンター契約を締結するときに、設立記念講演会が開催され、JRC会長の岡田先生、理事笠貫宏先生、AHAからHazinski先生が出席されました。その時日本循環器学会事務局が岡田先生の御業績を調べるなかで、日本循環器学会佐藤賞を受賞されていることを見いだしたのでした。

佐藤賞は、日本心臓財団初代会長の佐藤喜一郎会長の追悼記念に日本循環器学会と日本心臓財団が共同で制定したものです。その年に日本循環器学会英文誌(Jpn Circ J、現在のCirculation Journal)に掲載された研究論文の中より最優秀論文として選考されるものです。循環器領域の錚々たる先生方が受賞され、循環器医が望んでもなかなか手が届かない憧れの賞です。日本循環器学会総会のショックに関するシンポジウムでの発表を英文にまとめられ、1977年第3回佐藤賞「ショックの病態生理研究」を受賞されています(Jpn Circ J 1977:346)。麻酔科専門の岡田先生が循環器領域での最優秀論文賞を受賞されているのは、いかに素晴らしい論文であるかを物語っています。

日本心臓財団佐藤賞 Japan Heart Foundation Sato Prize

1977年 (第3回)	「ショックの病態生理」	岡田 和夫	帝京大学教授
----------------	-------------	-------	--------

Pathophysiology of Shock

KAZUO OKADA*, ISAO KOSUGI*, TERUO KITAGAKI*, YOSHIMARU YAMAGUCHI*,
HIROYASU YOSHIKAWA**, YASUO KAWASHIMA**, SYUNJI KAWAKAMI**
AND YOSHIMASA SENOH***

Japanese Circulation Journal Vol. 41, April 1977

内容を簡潔にご紹介したいと思います。1970年代にマイクロスフェアを用いた臓器血液量の実験系を確立され、成犬のショック時や心停止時の全身臓器の血流分布を明らかにして、更には治療時の効果を見るためアドレナリン・CO₂濃度・開胸心臓マッサージ・低体温療法などによる血流分布の変化を明らかにした研究です(麻酔 1976:227, 蘇生 2015:1)。心停止時の開胸心臓マッサージにより、脳・心臓・副腎への灌流分布が増加し、心拍再開時にも同様な分布をしていることを明らかにされました。更には低体温療法時に脳血流配分は維持され、またα刺激(アドレナリン)で冠血流と脳血流は維持されていました。救急蘇生時の各臓器の単独での血流増減の報告はありますが、全臓器の灌流配分を明らかにした研究はほとんど見られないもので、世界的に誇れる独自性の高い研究です(蘇生、2015,1)。現在の救急蘇生において継続して使用されている治療法への根拠となる重要な研究と思われる。

国際蘇生ガイドライン作成に参画されるようになり、業績の英語化の重要性を認識され、1970年代の多数の日本語論文が国際的に引用され難いことを残念がっておられました。日本やアジアの若い研究者が国際的な業績を数多く発表されるようになったことをご喜びになり、更なる発展を常に激励されていました。岡田先生の隠れた偉大な功績をここに広く皆さまにお伝えさせて頂き、今後につなげていただきたいと思います。

岡田和夫先生のご逝去に追悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。



一般社団法人
日本蘇生協議会 最高顧問

大阪青山大学健康科学部
特任教授

野々木 宏

故岡田和夫先生を偲んで 日本蘇生協議会名誉会長

救急蘇生科学の巨星落つ —救命の優しい鬼—

故岡田和夫先生は昨年11月26日、91歳で永眠された。先生のおちゃめな笑顔と舌鋒鋭く正論を吐く御姿を思い起こしながら、わが国における救急蘇生科学の社会的確立と国際展開という偉大な業績を残された先達へ、改めて、敬意を表したい。

私が故岡田先生と日本蘇生協議会(JRC)を通して、親交を深めたのは、2006年日本循環器学会の理事として、一般財団法人日本救急医療財団の心肺蘇生分科委員会に参加した時に、先生と隣席したことから始まる。会議前後を含めて短い時間であったが、院外心停止への救命第一とする価値観と使命感と危機認識を共有するとともに、先生の実験室に掛ける情熱に圧倒された。

私は1970年代、日本初のCCUとMobil CCUを確立した東京女子医科大学心臓血管研究所内科で昼夜なく厳しい研修を受け、心臓突然死の研究、植込み型除細動器やAEDの普及に取り組んでいた。当時は日本循環器学会理事として、「循環器医のための心肺蘇生・心血管救急のためのガイドライン(班長)」と「循環器専門医のAHA-ACLSの義務化(担当理事)」に取り組んでいたが、先生のアドバイスは極めて適切で勇気づけられた。先生は1999年には、蘇生科学のエビデンスに基づく国際標準化を進めるILCOR(国際蘇生連絡委員会)への加盟を提言され、2001年JRCは救急医療財団から独立し、JRCが中心となりRCAを設立し、ILCOR加盟を果たした。心肺蘇生にとどまらず、救急蘇生科学に対する研究・教育・診療から社会実装へ、国内からアジア、そして世界の人々への救急蘇生の普及という先生の壮大なロマンを実現するためには、ILCORの我が国唯一の国際的学術団体として活躍できるJRCの組織・財政基盤構築が急務と感じた。

2008年、公益財団法人日本血圧研究振興会に事務局を移転し、同財団内に「救急蘇生科学研究プロジェクト」を設置した。2009年3月には日本循環器学会学術集会(会長堀正二教授)と同時開催で、大阪にてアジア最初のILCOR会議(ILCOR2009)とI-ReSS(国際蘇生科学シンポジウム)の開催を実現できた。2010年にはJRCあり方会議を立ち上げ、2014年にかけて、JRCと救急医療財団との役割と権限を明確にし、JRCの一般社団法人化を果たした。

本法人は、野々木宏先生、坂本哲也先生、永山正雄先生を中心に、JRCはRCAのみならず、ILCORの国際コンセンサス(CoSTR)において、中心的役割を果たし、確固たる地位を確立している。心肺蘇生・救急蘇生科学は救急医学や循環器学等自然科学と人文社会科学を融合する極めて学際的領域であり、かつグローバルヘルスとして展開することが期待される。ILCORから先生へ届いた一通の手紙により、救命の鬼と化して、日本の救急蘇生科学の発展に信義誠実原則を貫き通された先生の満足された笑顔が目に見え、心安らにお休みください。

一般社団法人
日本蘇生協議会 名誉会員

内閣府健康・医療戦略参与
笠貫 宏

故岡田和夫先生を偲んで 日本蘇生協議会名誉会長

アジア蘇生協議会と2005年愛知万博

我らがスーパーマン岡田和夫先生が逝かれてから一年が経とうとしています。流石に逝かれる数年前からはあの「岡田だが！」で始まる電話は殆ど掛って参りませんでしたが、今も思い出されるのはアジア蘇生協議会の設立に奔走されていた頃の、即ち今から20年ほど前の先生の粉塵の活動でした。

2005年3月から半年間、日本国際博覧会が愛知県長久手町を主会場として開催され、その開催期間中の医療活動の統括責任者に指名され、愛知万博の事務総長を務められた中村利雄様のご理解を頂き、人口20万人の都市が半年間発生したものと考え、前年の2004年に我が国で初めてAEDの一般使用可能となったことにより、万博主会場(150ヘクタール)に300メートルを目処にAEDを設置し、by stander cpr を可能にしました。会場内を人口20万人の救急医療に関する夢の街をめざすため、医師・看護師・救急救命士・救急隊員・一般人による救護体制を構築しながら、加えて災害・救急医療医療に関わる国際シンポジウムを企画しているところで岡田和夫先生が急遽立ち上げられ会長をお勤めの日本蘇生協議会(JRC)からARC(アジア蘇生協議会)を発足させて、その結成調印式と記念講演会を企画してほしい旨の強いご要望を頂き、愛知万博協会への折衝の結果、2005年日本国際博覧会記念第1回災害・救急国際シンポジウムとして第1日救命の館&AHA HeartsaverAED コース(AHA Japanインストラクター)青木重憲先生 等3名、救命の館での体験コーナーを万博会場国際ロータリー愛知館で開催できました。



第2日(7月17日)には長久手市愛知医科大学たちばなホールにて災害・救急国際シンポジウムを開催、その中でResuscitation Council of Asia(RCA)アジア蘇生協議会結成調印式を挙行できました。

RCA発足にあたっては正に岡田先生の獅子粉塵のご尽力が有ったことは当時をご一緒した人は承知されていることです。小生も1990年頃から救急医療財団の心肺蘇生法委員会の委員ととして参加し、その中でAHAガイドラインに関する対応について日本での対応の遅れを、岡田先生は激しい論調で主張されていました。その後先生を中心とした人々により、特に2000年ガイドラインについては岡田先生のご尽力により、オブザーバーとしてILCOR(国際蘇生連絡協議会)に参加できました。AHAに対してはその組織上の問題点等、小生も疑点等無いわけではありませんが、結果として我が国での医学医療に関する教育方法までを変革させることとなりました。

「RCA調印式にあたって」の会発足の挨拶文の中に、小生への謝辞の文を読み替えて涙しています。「野口会長、先生のご厚意、ご支援は永遠に忘れません。」私はこれに変えて「岡田和夫先生心からその活動に敬意と感謝を申し上げます」。

やはり岡田先生はスーパーマンでした。

一般社団法人
日本蘇生協議会 名誉会員

愛知医科大学名誉教授

野口 宏

故岡田和夫先生を偲んで
 日本蘇生協議会名誉会長

「JRC」の生みの苦しみを目の当たりに
 今となっては懐かしい思い出

「JRC委員長 岡田和夫」発出のFax(平成14(2002)年2月7日 9:43)が手元にある。私の大掛かりな2回の引っ越しと大量の書類処分にも耐えて残った。タイトルは「第1回日本蘇生協議会(JRC)委員会議事録要旨確認の件」で、確認の「可 否」を求めるものである。

当時、岡田先生からは頻りにFaxが送られてきた。大方は、紙面に所狭しと綴られ、行が歪み、別の文章が矢印で挿入され、どれが主語やら？しばしば添え書きした文章が余白にはみ出してFaxに印刷されていないうえに、独特の崩し文字のため「判読不能」に困惑したものである。しかし、このFaxはパソコン印字であって文字も文章も整然としており、明らかに岡田先生の名を語る何者かの作品である。今となっては、はなはだ味気ない！

議事録の報告事項(1)は、「日本救急医療財団の心肺蘇生法委員会の国際部門として所謂JRCの活動をしてきたが、第13回心肺蘇生法委員会で、財団の委員会とは別に岡田委員を中心にJRCを創立することが承認された」ことを報じている。

第1回心肺蘇生法委員会は平成11(1999)年7月16日に厚労省会議室で開催され、筆者も岡田先生と共に出席した。委員長は小濱啓次教授で議題には、ILCORの説明と当委員会の役割、心肺蘇生法の検討課題、加えて日本蘇生協議会(JRC:仮称)の提案がある。ILCORに加盟するには、心肺蘇生法委員会が我が国を代表する機関であることが求められたため、JRCを創設する必要があるという趣旨である。3年越しの議論の末に心肺蘇生法委員会からJRCを分離独立することが決定されたわけであるが、この間、岡田先生の傍に居て先生の大変な辛苦を目の当たりにした。先生の議論を後押し、酒のお供で愚痴を聞き、時には熱のこもった発言が暴走して暴言に至り、その後始末にお詫びやら説明に畑中先生と共にエネルギーを費やしたことも何度かあった。ある日の委員会では、某委員とそれぞれ「灰皿を投げる」激論になり、双方の関係者が恐ろしい形相の2人をなだめるのに難儀した。JRCとしての分離は道理としても、無一文では活動できない。岡田先生の心労は察して余りあり、私も思わず「捨て子でも、一晩のミルクくらいは持たせるものだ」と口走ってしまった。



2009年 I-ReSS(大阪)で
 コスプレ姿の岡田先生とスタッフ一同

その後、2005年の日本版救急蘇生ガイドライン策定に始まり、2009年には大阪でのI-ReSS開催など、節目には大役を仰せ付けられ、先生のご満悦な笑顔を見ることができた。そんな楽しい思い出の一方で「丸川さん、あんたは俺の敵か味方か」との鋭い一言も、今となっては懐かしい思い出である。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



一般社団法人
 日本蘇生協議会 名誉会員

医療法人徳洲会集中治療部
 顧問

丸川 征四郎

故岡田和夫先生を偲んで 日本蘇生協議会名誉会長

わずか10年足らずでI-ReSSを日本に 岡田先生の行動力、国際力に深く敬意



昔のファイルを見ていました。私は2005年9月1日付けで日本版救急蘇生ガイドライン策定小委員会委員を拝命しています。ファイルからは当時の「心肺蘇生法についての五学会合同会合」という書類もでてきました。JRCの発足は2002年ですので、早くからお声かけいただいたことに感謝申し上げます。

いまから思うと、岡田先生は1998年からILCORに招聘され、2002年にJRCが発足、2005年にはRCA設立です。それから2009年には大阪でI-ReSS開催です。わずか10年足らずでI-ReSSを日本に引っ張ってこられた岡田先生の行動力、国際力に対して深く敬意を表します。

先日、2024年台湾でのILCORおよびRCA会議に初めて参加しましたが、JRCから初めて来たという、あちこちから俺は、私は、岡田先生とずっと一緒にやってきたんだと言われてました。その理由がいまさらよく解りました。

ILCOR DinnerではCountry Road ならぬILCOR Roadを今回Co-Chairsに選ばれたProf. Peter MorleyをはじめProf. Gavin Perkins, Prof. Kate Berg, などILCOR Big Nameの5人が歌ってかなり盛り上がりました。岡田先生がおられたら絶対壇上に上がっていたと思います。

先日、RCAのHON SecretaryのProf. Axel SIUから2025年7月17日はRCA創立20周年記念日なのでイベント企画したいとWhatsAppがきました。愛知万博関連事業としてのRCA設立総会、調印式は2005年7月19日のようなので、先方に確認が必要なのですが、岡田先生は2022年に91歳で逝去されたので74歳のときにRCAを作られたことになります。そこで思い出しました。そうです。渋沢栄一の「40-50はハナタレ小僧、60-70は働き盛り、…」です。私も65歳になりますので、あと10年は頑張りたいと思います。励みになりました。ありがとうございました。

岡田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



一般社団法人
日本蘇生協議会 業務執行理事

香川大学医学部救急災害医学
教授

黒田 泰弘



故岡田和夫先生を偲んで 日本蘇生協議会名誉会長

長きにわたりわが国の蘇生医学・医療を牽引

一般社団法人日本蘇生協議会(JRC)およびアジア蘇生協議会(RCA)を創設され、長きにわたりわが国の蘇生医学・医療を牽引された故岡田和夫先生を偲び、約15年間にわたり傍でお仕えし薫陶を賜った一人として、先生の輝かしいご業績、エピソードを簡潔に記させて戴きます。

1. 大学人として

岡田和夫先生は1931年に岡山市で出生され旧制岡山一中、旧制第六高等学校、岡山大学医学部をご卒業。東京大学大学院生物系研究科第三臨床課程(山村秀夫麻酔学教授)卒業後にフランス政府給費留学生としてパリ大学クロード・ベルナル病院Hôpital Claude-Bernard呼吸器センターに1962年3月まで留学され呼吸管理、人工冬眠療法、ショックを学ばれました。帰国後、東京大学医学部麻酔科助教授、帝京大学医学部麻酔科学講座主任教授(1972～2002の30年間)、帝京大学名誉教授に就任。この間、国際ショック学会会長、国際ショック連合会会長等を歴任されています。

ILCOR : Antwerp Belgium (2000) In Utstein Abbey (2001)



Dr. Okada presented that JRC had a strong intention to become a member of ILCOR.

2. 蘇生医学・医療への貢献

先生はパリ大学留学中から蘇生学Reanimationに大きな興味を持たれ、帰国後に日本蘇生学会等を設立、蘇生法の普及、教育、研究に常に取り組み、1964年東京オリンピック開催時には先生による心肺蘇生術講習会が朝日新聞で紹介されました。さらに世界の蘇生ガイドライン策定への参画、アメリカ心臓協会(AHA)、国際蘇生連絡委員会(ILCOR)への対応等を使命とするサイエンスの団体として2002年1月18日にJRCを創設し救急、麻酔、蘇生、循環器、集中治療、脳卒中ほかの蘇生関連主要学会、日本医師会、日本赤十字社、日本救急医療財団が参画。2005年、野口宏教授のご尽力によりRCAを創設。2006年にILCOR Executive Committee Member、2008年フランス麻酔・蘇生学会名誉会員、2009年国際蘇生科学シンポジウム会長に就任、2021年「AHA Lifetime Achievement Award in Cardiac Resuscitation Science」を受賞されています。

Preparing for Tokyo Olympic Games Latest CPR guidance by Dr. Kazuo Okada in 1964



The Asahi Shimbun

3. 脳神経蘇生、神経救急・集中治療医学・医療への貢献

筆者は1999年から2011年まで5学会合同「脳卒中治療ガイドライン」策定事務局長、英文版編集を務め、2005年に「AHA心肺蘇生と救急心血管治療のためのガイドライン2005」脳卒中章を担当しました。このため



一般社団法人
日本蘇生協議会事務局長・元常任理事

国際医療福祉大学医学部・成田病院
脳神経内科・集中治療部教授
医療安全管理部部長

永山 正雄

日本蘇生協議会名誉会長 故岡田和夫先生を偲んで



2009年に日本脳卒中学会を代表してJRC参加以降、JRC常任理事・事務局を務めて参りました。これは笠貫宏最高顧問(当時、のち東京女子医科大学学長)のJRC将来構想に基くものでした。岡田先生はパリ大学でポリオ、破傷風、重症筋無力症等による呼吸不全患者の従量式エングストローム呼吸器による人工呼吸管理を多数経験され、また脳蘇生の祖であるPeter Safar Johns Hopkins大学教授のお話もよくご存知でした。このような背景もあり神経系全般の救急・集中治療・蘇生医学・医療の頭領、重要性を理解され、わが国初の「JRC蘇生ガイドライン2010」以降、現在に至るまで「神経蘇生章」(のち「脳神経蘇生章」)の重要性をその慧眼により支えてくださいました。



神経救急・集中治療、脳神経蘇生発展の恩人



4. お人柄

岡田先生からは頻りに電話やメールでJRC、論文、講演に関する指示、相談を受け、時に阿佐ヶ谷のご自宅に車でお送りすることもあり、長時間、先生とお話をさせて戴きました。先生は厳しくも親しみ易いお人柄で、ご自分で「私は生来、他人のやらないことをやるという性格」と評されていました。大学教授を退任後も20余年にわたり情熱を持たれ、新しい領域を開拓され、国内外の蘇生医学・医療の発展のために尽くされました。

私は、先生が旅立たれる前日、最後に病室にお伺いしました。しっかり認識していただきましたが傾眠傾向でほとんど声にならず時折、頷きと手の動きで反応してくださいました。しかし帰りには目を見つめ両手で手を握ってくださいました。

岡田和夫先生は、91歳で旅立たれる直前まで生涯ロマンを持ち、目標を追いかけ多くを実現させたバイタリティーとパッションの先生でした。先生を偲び心からご冥福をお祈り申し上げます。



一般社団法人日本蘇生協議会
事務局長・元常任理事
国際医療福祉大学医学部・成田病院
脳神経内科・集中治療部教授
医療安全管理部部長

永山 正雄

故岡田和夫先生を偲んで 日本蘇生協議会名誉会長

「日本蘇生協議会JRCやアジア蘇生協議会RCAの歩みを止めずに」 岡田先生からの最後のご指導

我々は以前から、いろいろな業種の有志が集まって、「岡田和夫先生を囲む会」を定期的に行っていました。1枚目の写真は2018年頃に都内で開催した時。まだまだ日本蘇生協議会名誉会長としてお元気な頃でした。2枚目の写真は岡田先生が「アメリカ心臓協会 AHA ReSS Lifetime Achievement Award」をご受賞されたのをお祝いするため、新型コロナがひと段落していた2022年夏に当時岡田先生がおられた那須塩原の芦野温泉に伺い、会を開催した時。岡田先生の最新のご著書「麻酔蘇生一筋の人生一ぱり留学での体験も役立ちましたー」を直筆サイン入りでいただいたのも懐かしい思い出です。（この時の岡田先生の赤いネクタイ姿が素敵でしたが、お亡くなりになった時のご葬儀のお写真はこの時のものでした。）



個人的にも岡田先生とは、2008年にはベルギーで開催された欧州蘇生協議会で視覚聴覚障害者を対象とした蘇生教育の教育コンテンツを共に開発させていただき、私が学会発表させていただいたり、先の東京オリンピックの時に岡田先生がスタッフへの蘇生指導をご担当されたのを今回の東京オリンピックパラリンピックでは私がアカデミックコンソーシアムとして統括させていただいたり、日本蘇生協議会の広報委員長として岡田先生のいろいろな活動を記事にさせていただいたり、岡田先生の蘇生に関する貴重な資料をお預かりしたり、と公私共に本当にお世話になりご指導をいただきました。感謝感謝です。



2022年晩秋のお亡くなりになる1週間前には、「岡田和夫先生を囲む会」のメンバーを代表して私一人でご入院されていた那須塩原の病院に伺わせていただき、岡田先生と二人だけでゆっくりと1時間以上、お話をする機会もいただきました。その時も非常にしっかりとされており、岡田先生から直接、「日本蘇生協議会JRCやアジア蘇生協議会RCAの歩みを止めずに！」、とご指示をいただきました。今思い返すと本当に奇跡のような時間でした。日本蘇生協議会やアジア蘇生協議会の歩みは岡田先生の歩みそのものでもあり、そんな岡田先生の想いを皆様とも共有です。

岡田和夫先生、ゆっくりとおやすみ下さい。皆さん、引き続き、日本蘇生協議会やアジア蘇生協議会を、よろしく願います。頑張っていきたいと思います。

一般社団法人日本蘇生協議会
 広報委員会 委員長

東京慈恵会医科大学
 救急医学講座 主任教授
 (慈恵大学病院 救命救急センター長)

武田 聡

第4回J-RESS 日本蘇生科学シンポジウム



第14回日本蘇生科学シンポジウム プログラム2022年3月19日(土)

9:00~10:30	シンポジウム1「JRC蘇生ガイドライン2025に向けて:2020年での課題1」 座長: 坂本 哲也(帝京大学 医学部 救急医学) 相引 眞幸(八王子山王病院 救急科)
S1-1	BLSアルゴリズムを受講生に伝えるポイント 西山 知佳(京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 先端中核看護科学講座 クリティカルケア看護学分野)
S1-2	JRC蘇生ガイドライン2020での、2025に向けてのALSの課題 真弓 俊彦(産業医科大学 医学部 救急医学講座)
S1-3	心肺蘇生における適切な薬剤投与のタイミングとは 船崎 俊一(埼玉県済生会川口総合病院 循環器内科・リハビリテーション科)
10:45~11:45	一般演題 座長: 菊地 研(獨協医科大学 救命救急センター) 漢那 朝雄(聖マリア病院 侵襲期全身管理科)
O-1	院外心停止患者のプレホスピタルにおける高度気道管理の暴露時間と 神経学的転帰の関係 福田 龍将(虎の門病院 救急科)
O-2	地方大学で2回開催したCOVID-19流行下におけるJMECC (日本内科学会内科救急ICLSコース)の振り返り 岡澤 成祐(富山大学附属病院 第一内科)
O-3	心肺蘇生時の血液ガス分析による死亡率と神経学的転帰の予測 松浦 純也(済生会熊本病院 心臓血管センター 循環器内科)
O-4	心停止認識補助装置を用いた一般市民による心停止の認識および 行動の障壁の変化の検討 本間 洋輔(千葉市立海浜病院 救急科)
O-5	改訂版院内ウツタイン様式を用いた院内心停止登録の現状 西山 知佳 (京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 クリティカルケア看護学分野)
13:30~14:00	基調講演 座長: 畑中 哲生(一般財団法人救急振興財団 救命救急九州研修所)
KL	JRC蘇生ガイドライン作成の展望と国際連携について 野々木 宏(大阪青山大学 健康科学部)
12:10~13:10	教育セミナー(J-ReSSランチョン)17(LS17) 座長: 黒田 泰弘(香川大学医学部・医学研究科救急災害医学)
LS17	TTM and Post-cardiac arrest care: A new era Benjamin S. Abella(University of Pennsylvania) 共催:株式会社メディコン
14:15~15:45	シンポジウム2「JRC蘇生ガイドライン2025に向けて:2020年での課題2」 座長: 清水 直樹(聖マリアンナ医科大学 小児科学教室) 櫻井 淳(日本大学医学 部救急医学系救急医学系 救急集中治療医学分野)
S2-1	小児一次救命処置・予防や早期認識、そして一次救命処置 池山 貴也(あいち小児保健医療総合センター 集中治療科)
S2-2	小児二次救命処置・自己心拍再開後の集中治療の、現在とこれから 黒澤 寛史(兵庫県立こども病院 小児集中治療科)
S2-3	妊産婦心肺蘇生の経緯とこれから 櫻井 淳(日本大学医学部 救急医学系救急集中治療医学分野)
S2-4	市民によるファーストエイドJRC2020と今後の課題 田邊 晴山(救命救急東京研修所 研修部)
16:00~17:30	シンポジウム3「JRC蘇生ガイドライン2025に向けて:2020年での課題3」 座長: 武田 聡(東京慈恵会医科大学 救急医学講座) 新田 雅彦(大阪医科薬科大学 救急医学教室)
S3-1	COVID-19パンデミックに果たした欧米NeuroICUの役割とわが国の課題 永山 正雄(国際医療福祉大学大学院医学研究科 脳神経内科学)
S3-2	12誘導心電図伝送:急性冠症候群に関するプレホスピタルとの連携 田原 良雄(国立循環器病研究センター 心臓血管内科)
S3-3	EIT領域の現在のエビデンスと2025年への課題 松山 匡(京都府立医科大学 救急医療学教室)
S3-4	NCPRの現状と課題 杉浦 崇浩(豊橋市民病院 小児科(新生児))

プログラム

第14回J-ReSS
 日本蘇生科学シンポジウム

COVID-19および地震にもかかわらず
 予定の日時でweb開催された初めての
 J-ReSS

第14回J-ReSSは2022年3月19日土曜日に第49回日本集中治療医学会学術集会と同時期に、山形大学医学部麻酔科教授 川前金幸会長のもとで開催されました。コロナ蔓延防止法が現地で適応され現地開催できるのか不安であった上に、学術集会前々日に震度5強の地震が現地を襲った中で、完全WEB形式により予定された日程で開催されました。そのままの日程でWEB開催されたことに驚かれた方も多いと思います。

3月16日(前々日)23時36分に震度5強の地震がきました。3月17日(前日)仙台国際センターが壊れ現地参加開催はできなくなっていました。また新幹線、高速道路、仙台市内の地下鉄は不通となりました。この時、川前先生のご判断(ご英断だと思います)で学会用の資機材およびスタッフを仙台に集結させて配信センターを準備して予定された日時で開催することになり、同日14時38分には現地開催中止、そのままの日程で完全WEB開催に移行が発表されました。

3月19日に第14回J-ReSSはそのままの日程でWEB開催になりました。仙台の会場に到着してしまった演者および参加者への対応、全国参加者への周知、仙台にすでに到着された発表者のためのホテル会場準備、などが順次案内されました。

今回の迅速な対応には、現地開催の充実のために展示会場用に1か月前からテント会場を準備されていたことに加えて、ハイブリッドの準備もされてきた背景があります。コロナ蔓延防止の対応に加えて前日の総力戦で22会場すべてでの完全オンライン開催を可能とした(川前先生談)、こととなります。

第14回J-ReSSは、基調講演、3つのシンポジウム、一般演題、ランチョンセミナーで構成されています。

基調講演は代表理事の野々木先生にお願いしました。「JRC 蘇生ガイドライン作成の展望と国際連携について」というテーマで、G2025に向けてGRADEに精通したJRC構成学会・団体からの様々な医療従事者の参画が要望されました。

シンポジウムはすべて「JRC蘇生ガイドライン2025に向けて:2020年での課題」という目的で3つを企画しています。

シンポジウム1では、「BLS アルゴリズムを受講生に伝えるポイント」として、市民や医療従事者に対して講習会を実施される場合に受講生に伝えたいG編集委員の思い(西山知佳先生)、「JRC 蘇生ガイドライン2020での、2025に向けての ALS の課題」としてALSの薬剤以外の領域でエビデンスの確実性が非常に低いとされた介入の紹介と今後の方向性(真弓俊彦先生)、「心肺蘇生における適切な薬剤投与のタイミングとは」として同じ薬剤、同じ心室細動であっても心カテ室とERでは薬理学的反応が異なり、アウトカムが異なる可能性(船崎俊一先生)、をそれぞれコンコンと語っていただきました。

シンポジウム2では、「小児一次救命処置・予防や早期認識、そして一次救命処置」としてAEDの未就学児用パッド、あるいはモードという用語の変更などのトピック(池山貴也先生)、「小児二次救命処置・自己心拍再開後の集中治療の、現在とこれから」として呼気週末CO2モニタリング、薬物投与経路としての骨髄路、体温管理療法などの話題(黒澤寛史先生)、「妊産婦心肺蘇生の経緯とこれから」として子宮左方移動、死戦期帝王切開などの課題(櫻井淳先生)、「市民によるファーストエイド JRC2020と今後の課題」として急な病気および急なけがに対するそれぞれのファーストエイド(田邊晴山先生)、が熱く報告されました。



一般社団法人
 日本蘇生協議会業務執行理事

香川大学医学部救急災害医学
 黒田 泰弘



シンポジウム3では、「COVID-19パンデミックに果たした欧米 NeuroICU の役割とわが国の課題」として我が国で認識の薄いCOVID-19による神経障害とNeuroICUのあり方(永山正雄先生)、「12誘導心電図伝送:急性冠症候群に関するプレホスピタルとの連携」として救急隊への12誘導心電図の教育と病院前から心カテチームとの連携の強化(田原良雄先生)、「EIT 領域の現在のエビデンスと2025年への課題」としてトレーニングおよびシステムレベルそれぞれでの変更点(松山匡先生)、「NCPRの現状と課題」として蘇生時の人工呼吸デバイスおよび蘇生への家族の立合に関するトピック、さらにNCPR活動の現状(杉浦崇浩先生)、について未来につながる報告と議論をしていただきました。



一般演題は5演題となり、映えある最優秀演題賞JRC Okada Awardには、「改訂版院内ウツタイン様式を用いた院内心停止登録の現状」を発表された西山知佳先生が選ばれました。「院外心停止に比較し、病院内での心停止評価の課題を検討し、方向性を示した」ことが評価されています。西山先生おめでとうございます。



またALSのTTMに関するトピックに関して、ランチョンセミナーは特別講演にBenjamin S. Abella先生にWEBできてもらいました。アメリカは深夜でしたがタイトルはもちろん「TTM and Post-cardiac arrest care: A New Era」であり、TTM/TTM2 studyを切り刻んでもらい、今後の研究の方向性についてsuggestionいただきました。

私は仙台のホテルに5日間缶詰になり、ある意味理想的な環境で座長などをさせていただきました。牛丼屋とコンビニだけ往復したことも今となっては懐かしいです。

川前会長、医局員の皆様のご尽力に改めて厚くお礼を申し上げます。またご講演、座長、参加いただいた皆様に感謝申し上げます。



【開催概要】

名 称: 第14回日本蘇生科学シンポジウム
 (The 14th Japan Resuscitation Science Symposium)
 開催日: 2022年3月19日(土)8:50~17:30
 開催場所: 仙台国際センター 第6会場
 会 長: 川前 金幸(山形大学医学部麻酔科学講座)
 主 催: 山形大学医学部麻酔科学講座
 実行委員長: 黒田 泰弘(香川大学医学部・医学研究科救急災害医学)
 共 催: 一般社団法人日本蘇生協議会
 運営事務局: 日本コンベンションサービス株式会社 東北支社



第15回J-RESS 日本蘇生科学シンポジウム

第15回日本蘇生科学シンポジウム プログラム 2023年7月28日(金)
 帝京大学板橋キャンパス 臨床大講堂



9:00-10:10 シンポジウム1 「日本の蘇生学・医療 これまでとこれから」
 座長:笠貫 宏(早稲田大学 医療レギュラトリーサイエンス研究所)
 野々木 宏(大阪青山大学 健康科学部)



AEDから見た心肺蘇生 これまでとこれから
 演者:丸川 征四郎(吹田徳洲会病院 集中治療科)
 日本蘇生協会の歴史と今後の展開
 演者:相引 眞幸(八王子山王病院 救急科/
 愛媛大学医学部 附属病院)
 JRC, RCA, そしてILCOR
 演者:畑中 哲生(健和会大手町病院 救急科)



13:10-14:00 基調講演 「日本蘇生協会の歩みとこれから」
 座長:野口 宏(愛知医科大学 名誉教授)
 演者:坂本 哲也(☒般社団法人 日本蘇生協会)



14:10-15:30 シンポジウム2 「どうする どうなるJRC蘇生ガイドライン2025 ①」
 座長:武田 聡(東京慈恵会医科大学 救急医学講座)
 永山 正雄(国際医療福祉大学大学院 医学研究科 脳神経内科学)



BLS どうする どうなるJRC蘇生ガイドライン2025
 演者:西山 知佳(京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻
 クリティカルケア看護学分野)
 ALS: JRC蘇生ガイドライン2025をどうするのか
 演者:黒田 泰弘(香川大学 医学部 救急災害医学)
 ACS どうする どうなるJRC蘇生ガイドライン2025
 演者:田原 良雄(国立循環器病研究センター 心臓血管内科)
 Neuro どうする どうなるJRC蘇生ガイドライン2025
 演者:永山 正雄(国際医療福祉大学大学院 医学研究科 脳神経内科学)



15:30-17:00 シンポジウム3 「どうする どうなるJRC蘇生ガイドライン2025 ②」
 座長:加藤 啓一(日本赤十字社医療センター)
 清水 直樹(聖マリアンナ医科大学 小児科学講座)



NCPR どうする どうなる JRC 蘇生ガイドライン 2025
 演者:杉浦 崇浩(豊橋市民病院 小児科(新生児))
 小児の蘇生 ~2020からの潮流~
 演者:黒澤 寛史(兵庫県立こども病院 小児集中治療科)
 JRC蘇生ガイドライン2025での妊産婦部会の活動
 演者:櫻井 淳(日本大学 医学部 救急医学系救急集中治療医学分野)
 JRC蘇生ガイドライン2025を見据えて:ファーストエイドの観点から
 演者:小林 忠宏(山形大学 医学部 救急医学講座)
 EIT ~どうするどうなるJRC蘇生ガイドライン2025~
 演者:名知 祥(中濃厚生病院 救命救急センター)

プログラム

第15回J-RESS
 日本蘇生科学シンポジウム

2022年に惜しくも逝去された岡田和夫先生の追悼の意を込めて

2023年7月28日に第15回日本蘇生科学シンポジウム(J-ReSS)が、東京にて開催されました。第26回日本臨床救急医学会総会・学術集会の会長である森村尚登先生(帝京大学医学部救急医学講座主任教授)のご尽力により実現したものです。会場である帝京大学板橋キャンパスには、多くの蘇生科学に携わる専門家が一堂に会し、活発な議論が交わされました。

今回のシンポジウムは、日本蘇生協議会の設立に多大な貢献をされ、2022年に惜しくも逝去された岡田和夫先生の追悼の意を込めて、「岡田和夫先生 追悼記念プログラム」として企画させていただきました。野々木宏先生による開会のあいさつでは、岡田先生を追悼する国際的な蘇生科学者からのメッセージが紹介されました。Vinay M. Nadkarni先生(フィラデルフィア小児病院シミュレーションセンター医療ディレクター)とLim Swee Han先生(シンガポール救急医学会会長)からのメッセージが読み上げられ、さらにLance B. Becker先生(ニューヨーク・ファインスタイン研究所)からの動画メッセージも上映され、岡田先生の蘇生科学への国際的な貢献への感謝と追悼の念が伝えられました。これらのメッセージは、岡田先生のご業績が国境を越えて評価されていることを改めて示すものでした。

基調講演では、日本蘇生協議会の代表理事である坂本哲也先生から「日本蘇生協議会の歩みとこれから」と題して講演がありました。野口宏先生の座長の下、坂本先生は日本蘇生協議会の歴史から現在の活動、そして将来の展望まで幅広く解説され、参加者の理解を深めました。続くシンポジウム1「日本の蘇生学・医療 これまでとこれから」では、笠貫宏先生と野々木宏先生が座長を務められ、丸川征二郎先生をはじめとする著名な先生方の登壇により、日本における蘇生医療の歴史的な発展と今後の展望について、活発な議論が交わされました。

午後からは、2025年に改訂予定のJRC蘇生ガイドラインに焦点を当てた議論が展開されました。シンポジウム2では、武田聡先生と永山正雄先生の座長の下、西山知佳先生らが登壇し、BLS、ALS、ACS、Neuroの各分野について、次期ガイドラインの見通し、方向性が述べられました。シンポジウム3では、加藤啓一先生と清水直樹先生が座長を務め、杉浦崇浩先生らが登壇し、NCPR、小児の蘇生、妊産婦の蘇生、ファーストエイド、EITの各分野についてJRC蘇生ガイドライン2025の展望等が語られました。

特筆すべきは、多くの演者が岡田和夫先生との思い出に触れながら発表を行ったことです。各セッションを通じて、岡田先生の大きな業績、日本の蘇生科学の発展に対する多大なご功績が随所で語られました。参加者の皆様は、岡田先生の先見性と情熱、そして後進の育成に対する熱意を改めて認識されたものと思います。同時に、岡田先生の遺志を継ぎ、さらなる蘇生科学の発展に尽力することの重要性を参加者全員が再確認する場ともなったことと思います。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、ご尽力いただいた全ての関係者の皆様、そして岡田和夫先生の蘇生科学への多大なる貢献に心より感謝申し上げます。



【開催概要】

名称: 第15回日本蘇生科学シンポジウム
 (The 15th Japan Resuscitation Science Symposium)
 開催日: 2023年7月28日(金)9:00~17:00
 開催場所: 帝京大学板橋キャンパス 臨床大講堂
 会長: 森村 尚登(帝京大学医学部救急医学講座)
 主催: 帝京大学医学部救急医学講座
 実行委員長: 田邊 晴山(救急救命東京研修所)
 共催: 一般社団法人日本蘇生協議会
 運営事務局: 日本コンベンションサービス株式会社

一般社団法人
 日本蘇生協議会理事
 第15回日本蘇生科学
 シンポジウム実行委員長

救急救命東京研修所

田邊 晴山

第16回J-RESS 日本蘇生科学シンポジウム

第16回日本蘇生科学シンポジウム プログラム 2024年4月13日(土) 東京国際フォーラム ホールB5



9:00-9:05 会長挨拶
 北海道大学大学院医学研究院 免疫・代謝内科学教室 教授 渥美 達也



9:05-9:10 JRC代表挨拶
 一般社団法人日本蘇生協議会代表理事 坂本 哲也

9:10-9:40 Year in review(講演)2023年の日本発エビデンス、キラッと輝くアイデア
 座長:東京歯科大学市川総合病院 鈴木 昌
 演者:香川大学医学部救急災害医学 黒田 泰弘



9:50-10:50 Lightning talk(一般演題)
 座長(前半):大阪青山大学健康科学部 野々木 宏
 座長(後半):調布東山病院 須永 真司

1. 病院前気道管理中の胃内空空気流入が、心拍再開率に与える影響
 岡山大学病院 救命救急科 内藤 宏道
2. 院外心肺停止患者における神経学的予後に対する発症時間と病院前蘇生までの時間の影響
 千葉大学医学部附属病院 立石 和也
3. 心原性院外心停止におけるショック非適応波形患者に対する水素吸入療法:HYBRID II Trialの二次解析
 慶應義塾大学医学部救急医学 多村 知剛
4. オートショックAEDに対する医療従事者と非医療従事者の嗜好の違い
 岡山大学 高度救命救急センター 野島 剛
5. 新型コロナ感染症禍での蘇生トレーニング継続の取り組み
 獨協医科大学病院 椎名 行男
6. グルカゴン点鼻薬の普及が急務と考えられた1例
 ふじみ野内科クリニック 矢野 裕也



11:00-13:00 ガイドライン改訂に向けて(シンポジウム)
 司会(前半):健和会大手町病院 畑中 哲生
 藤沢市民病院 西川 正憲
 司会(後半):国立循環器病研究センター 田原 良雄
 医療法人はなぶさ会日浅循環器内科クリニック 日浅 謙一



1. ガイドライン改訂に向けて 一次救命処置(BLS)
 国立病院機構九州医療センター 救命救急センター 野田英一郎
2. ガイドライン改訂に向けて 二次救命処置(ALS)
 広島大学大学院 救急集中治療医学 大下慎一郎(他1名)
3. ガイドライン改訂に向けて 小児の蘇生(PLS)
 あいち小児保健医療総合センター 小児救命救急センター 池山 貴也
4. ガイドライン改訂に向けて 新生児の蘇生(NCPR)
 豊橋市民病院 小児科(新生児)杉浦 崇浩
5. ガイドライン改訂に向けて 妊産婦の蘇生(Maternal CPR)
 日本大学医学部救急医学系救急集中治療医学分野 櫻井 淳
6. ガイドライン改訂に向けて 急性冠症候群(ACS)
 獨協医科大学 救命救急センター 菊地 研
7. ガイドライン改訂に向けて 心原性ショック(Cardio-genic Shock)
 九州大学病院循環器内科 的場 哲哉
8. ガイドライン改訂に向けて 脳神経蘇生(NR)
 日本医科大学大学院医学研究科 救急医学分野 横堀 将司(他4名)
9. ガイドライン改訂に向けて ファーストエイド(FA)
 岐阜大学医学部附属地域医療医学センター 牛越 博昭
10. ガイドライン改訂に向けて 普及・教育のための方策(EIT)
 東京慈恵会医科大学 救急医学講座 武田 聡(他1名)



13:05-13:15 Okada-Award表彰式
 司会:東京慈恵会医科大学 救急医学講座 武田 聡
 プレゼンター:一般社団法人日本蘇生協議会代表理事 坂本 哲也



13:15-13:20 閉会挨拶
 聖マリアンナ医科大学 小児科学講座 清水 直樹

プログラム

第16回J-ReSS 日本蘇生科学シンポジウム

J-ReSSの一部を後日WEB配信で視聴 内科学会会員も大きな関心

第16回J-ReSSは、さる2024年4月13日に、東京国際フォーラムにおいて、第121回日本内科学会総会・講演会(会長:渥美達也先生)と日本蘇生協議会(Japan Resuscitation Council:JRC)との共催で開催されました。日本内科学会会員約150名を含む計約200名の皆様にご参加いただきました。

プログラムでは、「Year in review(講演)」として黒田泰弘先生(香川大学医学部救急災害医学)が登壇され、世界的に最も注目されている領域の一つであるECPRを中心に講演いただきました。また、シンポジウム「ガイドライン改訂に向けて」では、JRC蘇生ガイドライン2025の作成に当たっている作業部会の先生方に分野別に最先端のガイドラインについて講演いただき、「今後のガイドラインの展望」として総合討論を行っていただきました。一般演題は”Lightning talk“として計6演題のご発表をいただきました。このうち、多村知剛先生ら(慶應義塾大学)による「心原性院外心停止におけるショック非適応波形患者に対する水素吸入療法」が最優秀演題に選ばれ、Okada Awardが贈呈されました。この研究は、本邦で心肺停止後患者に実施された多施設共同無作為化比較試験の2次解析で、心停止後症候群に対する水素吸入がショック非適応波形患者に有用であったことを示すもので、今後の発展が期待されるものでした。

日本内科学会は、かねてより基本領域内科の専門研修において、JRC蘇生ガイドラインを遵守した心肺蘇生トレーニングをJMECCとして提供しております。また、今回のJ-ReSSの一部は内科学会講演会のサテライト企画としてWEB配信し、後日視聴をしていただけるようにさせていただきましたところ、本企画がサテライト企画の中で最も再生数の多い企画となりました。内科学会会員も大きな関心を寄せていたことがわかりました。国内最大の医学系学会として、今後も微力ながらも貢献してゆくことができればと願っております。

準備期間が短くなり、半日での開催となりましたので、十分な議論の時間をご提供することはできませんでしたが、想定を超えて諸先生方にご参加をいただくことができました。座席が足りないなどのご不便をおかけいたしましたこと、お詫び申し上げますとともに、このような盛会となりましたことを関係の皆様から心から御礼申し上げます。



【開催概要】

名称: 第16回日本蘇生科学シンポジウム
 (The 16th Japan Resuscitation Science Symposium)
 開催日: 2024年4月13日(土)9:00~13:20
 開催場所: 東京国際フォーラム ホールB5(東京都千代田区)
 開催形式: 現地参加型
 参加費: 無料
 会長: 渥美達也
 (第121回日本内科学会講演会会長 北海道大学大学院医学研究院)
 主催: 一般社団法人日本内科学会 救急委員会
 実行委員会: 一般社団法人日本内科学会 JMECC検討委員会
 共催: 一般社団法人日本蘇生協議会
 運営事務局: 一般社団法人日本内科学会JMECC事務局

一般社団法人
 日本蘇生協議会理事
 第16回日本蘇生科学
 シンポジウム実行委員長

日本内科学会
 専門医制度審議会副会長
 専門医制度審議会
 救急委員会委員長

東京歯科大学 教授
 市川総合病院 救急科部長

鈴木 昌

第 17 回日本蘇生科学シンポジウムのご案内 The 17th Japan Resuscitation Science Symposium(J-ReSS)

日 時：2025 年 7 月 5 日(土) 8時30分～18時30分(予定)

会 場：虎ノ門ヒルズフォーラム 4階

(東京都港区虎ノ門1-23-3)

主 催：一般社団法人 日本小児救急医学会

会 長：新田 雅彦(大阪医科薬科大学 小児科学・救急医学)

テ ー マ：「救命の連鎖」を科学する ～予防から回復まで～

※日本小児救急医学会 第38回学術集会 会長 清水 直樹(聖マリアンナ医科大学 小児科学講座)、
日本小児集中治療研究会 第32回小児集中治療ワークショップ 会長 黒澤 寛史(兵庫県立こども病院 小児集中治療科)と合同開催

会長挨拶

このたび、第17回日本蘇生科学シンポジウム(Japan Resuscitation Science Symposium:J-ReSS)の開催にあたり、皆さまにご案内申し上げます。本シンポジウムは、第38 回日本小児救急医学会学術集会および第32 回小児集中治療ワークショップに併設し、2025年7月5日(土)に虎ノ門ヒルズフォーラムにて開催いたします。J-ReSS は、2008 年に第1 回が開催されて以来、日本蘇生協議会(Japan Resuscitation Council:JRC)の参画学会が主催し、国内外で高い評価を得ている蘇生科学のシンポジウムです。小児領域では、2017年の第10 回(日本周産期・新生児医学会主催)、2018年の第11回(日本小児科学会主催)に続き、今回が3回目の開催となります。本シンポジウムは、蘇生に関する最新の知見と課題を共有し、今後の医療現場における蘇生科学の発展を目指して開催されてきました。

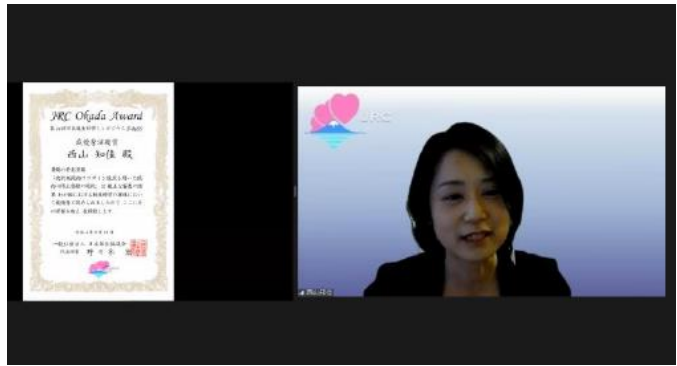
今回のテーマは、「救命の連鎖」を科学する ～予防から回復まで～です。わが国では、2010 年より小児と成人の「救命の連鎖」が統一され、成人においても予防の重要性が強調されました。さらに、一次救命処置においても成人と小児が同じアルゴリズムを用いることが決定され、米国や欧州とは異なり、小児と成人の隔たりを取り払い、同じ戦略で救命率の向上を目指すこととなりました。また、2010年は、蘇生法元年とされる1960年から50周年にあたり、CPRの開始手順がABCからCABに変更された年でもあります。この2025年、新たな蘇生ガイドラインが発表される年に、これまでの15年間の歴史を科学的に振り返りたいと考えております。

本シンポジウムでは、小児と成人の隔たりをなくし、多職種や企業の方々にも多数ご参加いただき、「救命の連鎖」の視点から、わが国における心肺蘇生を科学的に見つめ、蘇生科学の推進を目指す場となるよう鋭意準備を進めております。皆さまの積極的なご参加を心よりお待ちしております。

大阪医科薬科大学 小児科学教室・救急医学教室
新田 雅彦

改訂版院内ウツタイン様式を用いた院内 心停止登録の現状

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
先端中核看護科学講座
クリティカルケア看護学分野
西山 知佳



この度、第14回日本蘇生科学シンポジウム(J-ReSS)において、Okada Award 最優秀演題賞を受賞するという貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。

今回の受賞研究「院内ウツタイン様式を用いた院内心停止登録の現状に関する研究」は、大阪 CRITICLA study に参加している 15 施設(救命救急センター14施設および二次救急1施設)を対象に、院内心停止の記録様式の現状や課題を調査したものであり、院内心停止の記録と検証体制の整備に向けた知見を提供するものです。本研究は、院内での記録様式の統一の有無、記録の一元管理の有無、院内ウツタイン様式に準じたデータ収集の有無、IHCAの記録に関する教育の有無、院内ウツタイン様式必須25項目の収集の有無をGoogle フォームを用いたウェブ調査を実施しました。調査対象 15 施設のうち、回答を得た 11 施設(回答率 73.3%)のデータを基に以下のような結果が明らかになりました。

- ・院内記録様式の統一状況回答施設のうち、統一された記録様式を有している施設はわずか 2 施設であり、いずれも院内ウツタイン様式に基づいたデータ収集は行われていませんでした。
- ・教育と検証体制の現状これらの施設では、記録の一元管理や記録を基にした検証体制は整備されているものの、記録入力方法やその意義に関する教育が医療スタッフに対して十分に実施されていない状況が明らかとなりました。
- ・症例登録基準の不統一予期せぬ心停止症例の登録基準は施設ごとに異なり、統一された基準が存在していないことが分かりました。

本研究は、院内心停止の記録体制の現状を客観的に評価し、データの標準化や教育体制の強化が必要であることを示しました。これらの知見は、院内蘇生の質向上に向けた今後の取り組みの基盤となるものと考えています。このような成果を評価していただき、Okada Award 最優秀演題賞を受賞できましたことは、共同研究者の皆様のご協力とご支援の賜物であり、この場をお借りして深く御礼申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、ご協力を賜りました大阪 CRITICLA study の関係者の皆様にも心より感謝申し上げます。

本受賞を励みに、引き続き蘇生科学の質向上に寄与する研究に尽力して参りたいと存じます。ありがとうございました。

心原性院外心停止におけるショック非
適応波形患者に対する水素吸入療法：
HYBRID II Trialの二次解析慶應義塾大学医学部救急医学
多村 知剛

Okada-Award表彰式



この度は第16回日本蘇生科学シンポジウム(J-ReSS)において栄誉あるOkada Award 最優秀演題賞を頂戴し、誠に光栄に思います。

受賞研究「心原性院外心停止におけるショック非適応波形患者に対する水素吸入療法:HYBRID II Trialの二次解析」は、心原性院外心停止患者に対する水素吸入療法の有効性試験であるHYBRID II Trial(jRCTs031180352)の二次解析です。HYBRID II Trialは先進医療Bの承認を得て、日本の15施設で実施したランダム化二重盲検並行群間比較試験です。COVID-19の流行に伴い、試験が途中中止となり、主要評価項目では残念ながら水素吸入療法の有効性を示すことができませんでしたが、副次項目では水素吸入療法が院外心原性心停止後の転帰を改善する可能性が示唆されました。

いくつかの心停止蘇生後の重症度指標が提唱されていますが、広く普及したものはまだありません。概念的に軽症の患者群では水素吸入の有無に関わらず転帰は良好、一方で重篤な患者群では治療の有無に関わらず転帰は不良であることが予想され、その間の中等症の患者群に対して水素吸入療法は最も効果を示す可能性があります。心停止の初期波形がショック非適応波形の患者は、ショック適応波形の患者と比較して、神経学的転帰が不良であることが知られています。水素がより重症な患者において効果を示しているのではないかと仮説を立て、本研究では水素吸入療法を実施したショック非適応波形の患者の神経学的転帰を検討することを目的としました。結果、水素吸入は初期波形がショック非適応波形の患者において、良好な神経学的転帰と関連していましたが、ショック適応波形の患者ではその関連が認められませんでした。

HYBRID II Trialに登録された患者では、ショック適応波形の割合が統計学的に有意でないものの水素群に多い傾向にあったため、これが良好な神経学的転帰と関連しているのではないかとという批判がありました。本研究結果はその批判に反するものでした。症例数が少なく交絡因子の調整ができませんでしたが、従来予後が比較的不良とされるショック非適応波形の患者に対して、水素吸入療法が有効である可能性が示唆されたことは、重要な知見となります。本研究成果は、計画中の次期水素吸入療法の国際多施設研究に反映され、蘇生科学の発展に寄与することと期待しております。

最後になりましたが、今回研究発表の機会をいただきました日本蘇生学会および日本蘇生協議会の御関係者の皆様、JRC Okada Award の選考にお時間を割いていただきました御関係者の皆様、またCOVID-19流行期に研究の遂行にご尽力いただきました共同研究者の皆様には、この場をお借りして心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

■編集後記

一般社団法人日本蘇生協議会（JRC）創設15周年を記念して2017年に創刊された「JRC Newsletter」（日本語版）最新号をお届けします。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響、私の怠惰により発刊が遅れましたが、関係各位のご尽力により充実した内容となったと思います。

巻頭では、2022年11月に91歳で旅立たれた日本蘇生協議会名誉会長故岡田和夫先生を偲んでゆかりの先生方に追悼文を執筆戴きました。JRC生みの親の岡田先生は、大学教授を定年退任後20余年にわたり情熱を持たれ新しい領域を開拓、国内外の蘇生医学・医療の発展のために尽くされ、旅立たれる直前まで生涯ロマンを持ち、目標を追いかけ多くを実現させたバイタリティーとパッションの先生でした。

次に、近年の日本蘇生科学シンポジウム（J-RESS）の開催報告を黒田泰弘先生、田邊晴山先生、鈴木昌先生に、また2025年7月に虎ノ門ヒルズフォーラムで開催される第17回J-ReSSのご案内を新田雅彦先生にご執筆戴きました。また岡田和夫先生にちなむOkada Award最優秀演題賞を受賞された西山知佳先生に受賞演題「改訂版院内ウツタイン様式を用いた院内心停止登録の現状」について、多村知剛先生に受賞演題「心原性院外心停止におけるショック非適応波形患者に対する水素吸入療法：HYBRID II TRIALの二次解析」についてご報告戴きました。

JRCは2021年6月に「JRC蘇生ガイドライン2020」を医学書院から刊行しました。幸い各科医師、メディカルスタッフは元より、行政、救急隊員ほか極めて多くの方々に蘇生、救急・集中治療に関するわが国のバイブルとして活用されています。現在「JRC蘇生ガイドライン2025編集委員会」（委員長；坂本哲也JRC代表理事、顧問；野々木宏JRC最高顧問）各作業部会では、2025年10月のWEB版（パブリックコメント募集版）公開、2026年3月の書籍版（最終版）公開に向けた作業が佳境に入っています。

JRCは広く心肺脳蘇生、救急・集中治療の臨床、サイエンスに関わる学際的かつ公益性の高い学術団体として、国際蘇生連絡協議会（ILCOR）、アジア蘇生協議会（RCA）等、国内参画学会・団体と連携しつつ活動しています。「JRC Newsletter」が、国内外における蘇生、蘇生科学の進歩、交流に資する価値ある情報源となるように、各位から忌憚ないご意見、ご支援を戴けますようお願い申し上げます。

2024年12月吉日
一般社団法人日本蘇生協議会（JRC）事務局長 永山正雄
（国際医療福祉大学医学部・成田病院 脳神経内科 集中治療部教授）

一般社団法人 日本蘇生協議会 参画団体一覧

<理事学会>

一般社団法人 日本救急医学会
一般社団法人 日本集中治療医学会
公益社団法人 日本産科婦人科学会
特定非営利活動法人 日本脳神経外科救急学会
公益社団法人 日本麻酔科学会
一般社団法人 日本循環器学会
一般社団法人 日本内科学会
一般社団法人 日本臨床救急医学会
日本蘇生学会
一般社団法人 日本小児救急医学会
一般社団法人 日本周産期・新生児医学会

<非理事学会・団体>

公益社団法人 日本小児科学会
一般社団法人 日本歯科麻酔学会
一般財団法人 日本救急医療財団
日本赤十字社
一般社団法人 日本神経救急学会
一般社団法人 日本小児麻酔学会
一般社団法人 日本Shock学会
一般財団法人 エマージェンシー・メディカル・レスポonder財団
一般社団法人 日本救護救急学会
一般社団法人 日本神経治療学会
NPO 学会・団体 特定非営利活動法人 日本 ACLS 協会
日本脳低温療法・体温管理学会
特定非営利活動法人 大阪ライフサポート協会
特定非営利活動法人 つなぐいのちの輪バイタルネットジャパン

一般社団法人 日本蘇生協議会 賛助会員一覧

アイ・エム・アイ株式会社
旭化成ゾールメディカル株式会社
アテナ工業株式会社
大研医器株式会社
日本ストライカー株式会社
株式会社フィリップス・ジャパン
株式会社ヤガミ
レールダルメディカルジャパン株式会社

JRC Newsletter Volume 6. No 1. 2024 通巻 9 号

<https://www.jrc-cpr.org/newsletter/>

2024 年 12 月 31 日 発行

発行 一般社団法人 日本蘇生協議会
〒162-0833 東京都新宿区笹筒町(たんすまち)4 3 新神楽坂ビル2階
編集 一般社団法人 日本蘇生協議会 JRC Newsletter 編集委員会

© Printed in Japan
